医事・文談　九百九十八

《正岡子規（36）の続き》その286

平岸　三八

パリに着き、さっそく訪れたのはルクサンブール美術館（当時のフランス近代美術館）であった。カイユボット寄贈の印象派の数多き名作は入口の小さき一室に虐待されている。しかしそのことごとくが今日ルーブルのサル・ド・ジュ・ド・ポームに日々世界の客を集めている。

その時すでにルクサンブールで自分には他に見るものはなかった。そして発見した事は、浅井　忠ほどの淡く、しかししっかりした風味ある画家は他に見出し得なかった。ことにその水彩画は比類なく、もっと世界的に認めるべきものと思って認識を更にした事である。

以上が梅原の師浅井の回想である。随分昔のことを思い出して書いているのだが、高齢になってもなかなかしっかりしていることは、97歳の長寿を保ったことからも知れる。

梅原は安井と共に、昭和27年（一九五二）揃って文化勲章を受けた。弟子が二人も章を受けたのだから、浅井ももっともっと長生きをしたら、日本の洋画の開拓者として何らかの賞を受けたのではと残念である。

列伝③　陸（くが）　羯南（かつなん）（享年51歳）

生年一八五七（安政四・一〇・一四）
歿年一九〇七（明治四〇・九・二）
死因　肺結核

子規の物心両面にわたる庇護者である。

司法省法学校時代の同窓加藤拓川（本名恒忠、子規の叔父）の紹介によって、上京の子規を初めて引見。文科大学を中途退学の子規を、自ら経営する日本新聞社に入社させ、母八重、妹律との同居を斡旋し、隣家に住む子規一家の面倒を見た。病気で出社できない子規を終生雇用し、苦痛で阿鼻叫喚する子規の枕頭にあって、「ああ、よしよし、ボクがついている」と額をさすると、痛みが治まったと、メスメリズムのような態度があった。

氏は津経藩士・中田謙斎、なほの次男として弘前に生れた。本名は実。羯南の号は、少年時、漢学塾で「風涛靺羯の南より来たる」と詠んで師に賞められたのに由るという。

明治6年、東奥義塾に入学し、漢学、英学を学び、翌7年、宮城師範学校に入学したが、意に満たず退学、東京に出て司法省法学校に入学、原　敬、福本日南、国分青厓らと同窓となった。

12年、賄征伐への学校の措置に反対し、原、国分らと退校処分となった。帰郷して青森新聞社に入社、親戚の陸（くが）家をついだ。

間もなく青森新聞社を退社し、北海道に渡り、紋鼈製糖所（現伊達市に明治13年内務省勧農局の設けた日本最初のビート糖製造工場）につとめた。ヨーロッパの甜菜事業を見習って始めたものだから、製法についての翻訳にたずさわったのであろう。

明治14年、製糖所を辞任して東京に出て、翻訳などで暮した。16年6月、太政官御用掛となり、文書局につとめた。夏ごろ友人加藤拓川の紹介によって上京した子規と初めて会った。これが羯南と子規の長い関係の端緒となった。

明治18年内閣制度の創設にともない、官報局勤務となったが、21年辞任、新聞「東京電報」を創刊し、主筆兼社長となった。

明治22年2月「東京電報」を廃刊し、新たに新聞「日本」を創刊し、主筆兼社主となった。

以後、羯南の文章は殆んど「日本」に発表された。「日本」は政府批判をかかげ、しばしば発行停止処分を受けた。その損害を補填する意味で「小日本」を発刊し、子規がその主筆となったりした。

「日本」は当事の商業新聞が漢字にルビを附して読みやすさをはかっていたのに、ルビを附けず、また世相のいわゆる三面記事を載せず政論を主としたので売れゆきは悪かった。しかし子規の文章をのせたり、殊に歌論の激烈なのを（子規は特に許しを得てだが）のせたりした。